
最凶の女

いよむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最凶の女

【Nコード】

N6689A

【作者名】

いよむ

【あらすじ】

最凶です。ものごとく運悪いです。

雨の中傘を差して歩くのは、最低な気分だった。別に雨がきらいなわけじゃないけど、今日は高校の入学式。どうしてこんなじめじめした時に、思い出になるであろう日を迎えなきゃいけないのだろうか？

それもこれも・・・

>ブツブツ<

後ろから車の音。無意識に体をどかす。

目に留まる水溜り。

この位置はやばいつ。

かまわず走り進む、黒色の車。

頭で理解しても、体が動く余裕はない。

<バツシャア>

想像通りの出来事が私の身に降りかかった。車によって飛ばされた、水溜りの泥の水が私に襲い掛かってきたのだ。そして私は抵抗することもできず、頭からその泥水をかぶっていた。

傘をそしていたのに、どうしてジャストな位置に全ての水が飛んできたのだろうか。人為的なものを感じる。と思うのはひねくれではないだろう。

今日は入学式。

私はどろどろの姿で人生の一步を進むことになった。

「あははっ。記念すべき高校の入学式をジャージで受ける女子高生は、あんただけだったよっ。さすがだねっ」

これは私には死活問題に近いのに、中学からのこの友人は大口を開けて笑い飛ばした。

高校初めの入学式とは、中学とは違う高校の少し大人の人生を歩む

にはとても重要な日だ。このときにクラス発表やら、クラスのメンバーの顔合わせやらするのに、入学時期ジャージで出席。初顔合わせもジャージとかって、笑いものの何でもない。ってか本気で友達ができるか心配なところである。高校生活第一歩にして、もう終わってしまったかもしれない……。

「私もシヨクなんだよ。初めて……初めての日なんだよっ！！初めての高校生活。初めての制服。それが全部ジャージによって崩れるなんて……。この茶色に染まった制服今からでも着てこようかな……。」

「あははっ。大丈夫大丈夫。みんなそんなに、気にしないよっ。まあ、ニツクネームはじゃあじ子になるかもだけどね。」

「それ最低……。」人の不幸をひとしきり大笑いした後、やっとこの子は苦しそうに息をついた。こんな風に気さくに話せるのも、ゆうこは中学からの大の親友だからだ。

ゆうこは同じ中学で、ずっと一緒にいた友達だ。それこそトイレも一緒にじゃないと行かないほどの、親友だと私は思ってる。

「でも本当、あゆみは不幸だよなー。もう何をやってもダメダメ。」

「むかつくなあ。その言い方。」

「あははっ。ごめんごめん。でもあゆみが不運になったのはあの時からでしょー。あのおみくじ。」

私はとても不運な女だ。それはなんか被害妄想とか痛いことじゃなくて、自他とも認める事実だった。

そしてそれには理由がある。(と思ってる。)

今年の1月1日。友達(ゆうこも含めてみんな)で初詣に行った時、1年の運勢を知ろうということみんなでおみくじを引いたのだ。大吉や小吉などみんなが無難な運勢を引いていく中、私はとんでもないものを引いてしまった。

<特凶>

もう周りのみんなは大笑い。特凶なんて存在したんだあ、だの、あんなともう高校終わったね、だの他人事だと思つて、ボロクソ言つてくださった。

でもその時は私も受験の不安はあつたけど、ただのおみくじだと友達とふざけあつていた。だって特凶でしょ？こんなんノリ以外の何でもないじゃない？

でも・・・ノリではなかった。

それ以来私は、それこそ特凶だった。

そりゃ、受験会場間違つわ、会場の門でバナナの皮にすべるわ、受験当日忘れそうになつた鍵を親が落として渡すわ、電車の中ではスキーに行くであろう学生が滑るやら滑ろうやら連呼するわ、外れた消しゴムケースがどうしても入らないやら・・・

ここはどうでもいいが、確実にいわれていた第一志望の大学は落ち、なんとか第二志望の学校にとどまつた矢先これだ。

もうオミクジのワンダーさに、脅えるしかない。

「本当、特凶なんてネタみたなおみくじ引いてからまぢいいことないよ・・・。」

「そうだよねー。イベントごとにはことごとく雨は降るし、段差にはことごとくこけてるし、提出物はことごとく忘れてたもんねー。

もう本当特凶だね。」

「でもまあ、ゆうことりようがいる高校に入れたのはすごい幸運だけだね。」

「あははっ。言うなあ。」

本当にそうだった。

これで友達のまつたくくない高校になんか入れられた日にゃー、おみくじを引かせた神社に殴りこみに行つてる所だ。つてか特凶つておみくじを作つたことを文句だけでも言いにくいかなあー。

「でもあゆみの引いた特凶って、なんか全体的に運氣最悪でしょうって書いてたけどさ、恋愛のところだけ、待ち人来るってなってるってなかつた??」

「それこそ不運だし。私にはりょうと言う結婚を約束した旦那がいるのに……。」

ちよつと演技っぽく言ってみる。ゆうこはまた大笑いをして、なんだあーつと私の頭をぽかつと殴った。

ゆうこのこんなところを私は大好きだった。他の女の子はノリでものろけたりしたらちよつと嫌そうな顔をする。でもゆうこは違った。そりゃバカにしたように言うけど、本気で私の相談をのってくれるし、本気で応援してくれるし、本気でのを楽しんで聞いてくれる。恋愛で悩んだときはゆうこ以外に相談はできなかつたし、したいとも思わなかつた。それこそ親友のあかしだよ。など一人で考えてたりするのは、秘密だ。

ちらりと教室を見回す。ゆうことは同じ教室になれた。それはすごく喜ばしいことだけど、りょうとは離れてしまった。少し寂しいな……。

クラスの子達が、私のジャージが気になるのかちらちらとこちらを見ている。ああ……本当にこのことが原因でいじめられたりしないだろうか。初めて不安で仕方ないのにあの特凶めっ!!

<ガラガラガラ>

ザワザワしてた教室が一瞬で静かになる。よれよれのスーツを着た、無精ひげの男が入ってきた。多分このクラスの担任だろう。

どんな人なんだろう。恐い人だったら嫌だな。この瞬間が一番どきどきするかもしれない。

「このクラスを担当することになった野村です。野原の野に村田の村だ。よろしくなつ。」

みんな緊張してるのか何も言わなかつた。先生も少し狙ってたのが、すごく恥ずかしそうに頬をかいた。

「なんだよ。この岩みたいなのは空気は。もっとテンションあげろや。恥ずかしいだろ。」

「先生つまんないよ。」

男子の一人が言い、みんながどつと笑った。この人はとてもいい人そう。それにこのクラスもなんだかい雰囲気。

すごく安心して、前に座るゆうこと笑顔で言葉じゃないメッセージを伝え合った。

「尾道歩。おつ、お前が水ぶっかけられて、一人ジャージで出席した不運娘か。」

みんなが笑い、教室がゆれた。興味で溢れた視線がそそがれる。

恥ずかしくて顔を上げられなかった。ああ。やっぱり特凶の効果がこんなところまで出てるんだ……

グッバイ高校生活。

そしてアニヨハセヨいじめ。

「まあ、そんな凹むなって。俺だっていつもはジャージだぞ。入学式だから、こんなびしっときめてるが。」

またクラスみんなが笑いだす。私に向けられてた視線が柔らかいものにかわった。この先生は私のためにこんな事を言ってくれたんだ……

なんていい人なんだろう……。

「まあ、ニツクネームはじゃあじ子だけだな。」

私の感謝の気持ち、音を立てて崩れていった。

ああ。

高校生活も特凶のようだ……。

やはり神社に殴りこみに行こう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6689a/>

最凶の女

2010年12月18日20時14分発行